

# 講演会

日時：2008年2月9日（土）  
場所：広島大学教育学部第3会議室

演題『私のバレーボール人生』  
講師 重田 篤史先生

皆さんこんにちは。41期の重田と申します。平成元年にこちらの大学に入学しまして41期になります。もう卒業して19年、そうですね、そのままになります。今日はこういった形、「私のバレーボール人生」ということで橋原先生から御案内頂きまして、諸先輩方に人生を語るというかですね、バレーボール人生に対してですね、私にも語れるところがあるのかなと迷いながらですね、せっかくこういった私の、たまたまですね、私の実業団に入ってバレーボールという競技を味わいましたので、そのことを話すことで皆さんに何かですね、お役に立てることがあればということで引き受けさせて頂きました。申し訳ないですね、何分私もこういった形で講演させて頂きますのは初めてでございまして、どちらかと言うと皆さん先生方ですので、お話しされるのは慣れてらっしゃる方々なので、大変恐縮でお恥ずかしい限りなんですけど、精一杯お話しをさせて頂きたいと思っております。今日はよろしくお祈りいたします。

まず一つですね、最近、人生のお話をさせて頂く前にですね、一つ驚いたことがですね、女子チームの方ですね。今、正月にあつてですね、あの全日本選手権が、多分僕がやっていた頃は、ゴールデンウィークに大阪の府立体育館でやっていたような気がするのですが、そこに、かなり大学生としては良い成績を収められたと言いますか、今まで女子バレー部始まって以来のことだと思いますのでこれからも頑張ってください。おめでとうございます。

始めさせて頂きます。ではですね、私のバレーボール人生ということでお話しさせて頂くのですが、まず私のバレーボール人生を振り返る前に、まず簡単に私の生い立ちというところからお話させて頂こうと思っております。当然御覧になった方はすぐ、大体初めてお話す時には皆さん、「大きいですね。何センチあるんですか？」とまあよく、会社勤めをしていますので、通勤の電車の中でもイヤホンをつけて、音楽でもラジオでも聞いている時でも、大体後ろの方から「あの人大きいね、何メートルあるの。」みたいなのをよく聞くこともあるんですが、何でこんなに大きいのかということから簡単に、ある意味私の原点というのかなというのがありますので、そこから御紹介させて頂こうかなと思っております。

2人の子どもが写っていますが、実は多分これまだ首が座った頃、8ヶ月ぐらいの頃なんですけど、上の方が姉になるんですが、実は2つ年上です。なんですけど、生まれて既に半年でたぶん体重が同じぐらいなんです。かなり食欲が旺盛でですね、生まれた時はたぶん3600ぐらいで大きめだとは聞いているのですが、生まれてから間もなくは、かなり食欲が旺盛で、普通の赤ちゃんの倍というか、同じ時期の人の体重の倍ぐらい成長を遂げていた。遺伝子的ところもあるんですが、実は小さい頃から大きかったです。よく皆さんも聞われることがあると思うんですが、「バレーして大きくなったの？」というよりもどちらかと言うと、生まれつきでこんな感じで大きくなってきました、ということなんです。なかなかで

すね、私も上が姉、下が妹ということで、兄弟3人で遊ぶという時には大体女の子遊びですね、ままごとですとか家の中でする遊びが、そういったことがほとんどだったので、なかなか男の子らしい遊びをすることがなく幼少期を過ごしたという感じですね。あまり外で遊ばない。だから、運動も体を動かすのも苦手というかですね、器械体操とか大の苦手で、どちらかと言うと手でごちゃごちゃするのが好き、そんな感じの子ども時代を過ごしました。ですから、他の子どもが当時、私が小さい時には、長嶋さんとか、王さんとかが現役でプレーされていた、やれ756号のホームラン打ったとかのこともあったんですが、ほとんどスポーツに興味がなかった、そんな感じの子ども時代を過ごしていました。

そうしながらも、親の方が心配だったんでしょうね、「小学校に入ったら何か運動しなさい、もっと外で遊ばないとだめですよ。」という話になりまして、まだ当時サッカーとかそういうのがなくて、大体ソフトボールですね、何かスポーツをしようと思ったら、田舎の所でしたから野球チームしかないなということで、スポーツチームにこういうソフトボールチームに入らされて、写真が残ってますけれど、ほとんど半分嫌々ですね、嫌々入って何となくやっていたという感じですね。親の方が熱心に「行け行け。」と。行きたくないと言っても行けというような感じで、本人はぶっきらぼうな顔をしてますけれど、そういったところで1回か2回はソフトボールをやるという感じでした。それでもなかなか嫌々というのは分かったみたいで、野球という集団スポーツではなくて逆に違う個人競技、個人競技をやらせたいというのが親の気持ちであって、そこで始めさせられたのが剣道で、「重田」と書いてありますが、これは私なんですけど、皆とやるのが嫌だったんで、一人で、武道ですね、警察署が近くにあったんで、そこの剣道場に行って剣道を。でも本人は嫌なんです。剣道は、竹刀で叩かれることもありますし、裸足ですから寒いんです。夏は暑いし冬は寒いし、あまり面白くないし、痛いし、あまり後ろ向きのイメージしかないんですが、こういった形でスポーツは嫌々ながらやっていた、そういったところなんです。そうは言いながらもですね、外見上は、先程も言ったのですが、小学校の5、6年生の時点で身長は160センチ以上あるんですね。学校でも1番か2番の身長で、「何か運動やってるの？」という話を聞く度に「ああ、嫌だな。」という風に。ほとんど、活発に、スポーツというか動くことが嫌いな小学生時代を過ごしてました。当然ランドセルも似合わない。何せ170センチ近くある小学生ですから、本人も自分の方も「嫌だなあ。」と思いながら通っていたような記憶があります。

当然、あの、背が高いですから、入学と同時に運動部の先生方が目をつけられて「うちの部に来い。」という形の勧誘が始まるんですよ。大きいからということで、まず目をつけられたのが、まずはバスケットボール部。自分の姉がバスケットボールをやっていたのですが、姉の方が「家の弟が大きいですから、先生バスケット部に入れますよ。」ということ半信半疑で半年ぐらい前から言っていたんですよ。「入学と同時にバスケットボール部の練習に来い。」と誘われて、「仕方ないかなあ。」と思って行こうとしていたんですが、その前に、ここに黒いTシャツを着ている、もう連絡を取ってなくて退官、退職されているんじゃないかと思うのですが、山口の平田中学校に入学したんですが、水津先生という結構バレーボールで割と有名な先生で、当時ですね、そこの方が、私を勧誘に来られてですね、「重田、バレーボール部に入れよ。」「いや、僕もうバスケット部に決まっていますし。」あの、用紙ですね、第一希望とか第二希望とか書く用紙で、バレーボールの欄はなかったんです。

第一希望がバスケット、第二希望がまあ野球、三番目はもう白紙みたいなもので出して、それで入部を受け付けるみたいな仕組みだったんですけど。バレー部とか全然書いてなくて。で、何でバレーボール部に入るようになったかという、この先生がですね、「冬になったらバレー部はスキーに皆連れて行くんだ。だからバスケットボール部なんかそんなの無いから、バレー部だったらスキーに行けるから、スキーに行きたいんだったらバレー部に入れよ。」という形で勧誘されたんですね。で、私も全然スキーとかやってなかったんですけど、イメージもなくて、まあ楽しそうだなあと。「じゃあ、バレー部に入りますよ。」と言って始めたのが実はきっかけです。バレーなんか知らないし、あの一、バレーボールっていうのがそもそも男子がやっているというスポーツのイメージがなかったんですね。女子バレーのイメージだったんです、当時。で、あの、まあバレー部に入りました。

で、これがまた、大変なとこだったんですね、バレー部が。で、当時は、中学校、山口県は少ないんですけど、まあまあ強豪のチームで、バレー部の先輩も多くてですね、一つのクラブで、そうですね、上の先輩が、3年生の先輩が14、5人で、2年生の先輩が20人近くいるんです。で、1年生で入ったのがちょうどこのメンバー、6人か7人くらい。で、皆が、先輩達がスパイクとか練習とかするのを全部球拾い、1年生の最初はという形で始められてですね、大変で、バスケットボール部に入れば良かったなと思いつつも、先輩が恐くてですね、辞めるに辞めれず、1年生の4月から続けていました。まあそうは言いながらも背が高かったんで、皆さんからのこう、先輩方から期待されていたというのもあったんでしょうが、なかなかこう、辞めよう辞めようと思いつつも続けていました。

で、そんな中ですね、実は一大転機と言いますか、1年生の冬に、私にとって、こう、ここまで、この時にこういう思いをしていなかったらバレーをしていなかったらどうなあと、スポーツをしていなかったらどうなあとという思いがありまして。えっと、1年生の冬に、日が暮れるのも早いですし、手がかじかんで、外でバレーボールの練習なんか出来ないというところがあってこの先生が、近くに坂があるんですね。30メートルくらいの坂なんですけど、そこを毎日20本走る、でその後に校庭を何周かしてその日の練習はおしまい。で、それをする訳なんですけど、先輩達と一緒に走るんですね。当然、まあ運動嫌いですから足も遅いんですけど。ですが、その冬2、3ヶ月ですね、11月から、まあ12月くらいですかね、12月くらいから翌年の2月くらいまで、ずっと毎日坂ダッシュと校庭のランニングをやっていたんです。そしてですね、明けた3学期の始めくらい、自分では全然体力が付いたとは思ってないんです。で、明けた次のスポーツテストが、校内のマラソン大会ですね、記録会があったんです。で、その坂ダッシュとランニングをする前までは、クラスで走っても真ん中か後ろくらいを走っていたんです、どんなに頑張っても。「こんなに辛いのに何で走らないといけないの。」という感じだったんですが。その坂ダッシュをした時にですね、その時は校庭3周走る、1500メートルの競走か何か保健体育でやったんですね。その時に、自分の体が驚くんです。全然疲れないんです。体力が、まあ自分が思っていたより付いていたんですね。その時、まあ学校、クラスで一番速い子なんか大体ダントツで一番に走って行くんですけど、その子について行っても全然疲れない体になっているのに驚いて、その時すごく嬉しかったですね。「あ、練習したらこんなに速く走れるんだ。しかも全然疲れない。」ついでにもう、この一番の子を抜かせるなというくらい余裕を持って、トップを走れるくらい、すごく自分の中で感動したんですね。何のことはな

い、多分、保健体育の時間にですね、そういうことを思って、「あ、これは練習したら面白い。僕、バレーボール出来るかもしれないなあ。」という思いが出てきました。で、その頃からですね、割とこう真面目に、バレーボールに、まあ先生がやれって言うことはやってみようかと。走れって言われましたら走りますし。今日は雨が降っているから外で出来ないと、校内の階段、1階から3階までを1段抜かしで、うさぎ跳びで30往復しなさいと言われて、大体嫌だとか言って途中で帰るんですけど、真面目にやりました。その頃からかなり本気に、体を鍛えたら自分も出来るかもしれないという思いがありまして、やり始めました。だったんですが、体力はまあまあ付くんですよ。でも、全く如何せん、体の技術がですね、まだついて行かないというのもあって、更にそうですね、その年の新人戦、中学校2年生の時だったと思うんですが、新人戦に出まして、市内の大会だったんで、まあそんなにレベルは高いものではないんですが、1回戦で負けちゃったんですね。で、たまたま私のポジションがエースだったんですが、先生がものすごく怒ってですね、その先生からしたら新人戦で1回戦で負けるというのはあり得ない話なんですね。「何でお前ら負けたんだ。」というような形でかなり絞られました。で、その時最後に面と向かってその先生もかなり怒り心頭でですね、私もまあ、打てないし、確かに客観的に見ても私が上手くいかなかったのかなというのがあったんですが、目の前で指を指されて、「お前のせいで、お前のせいで試合に負けたんだ。お前のせいだぞ。」と言って、目の前で皆の前で怒られたんです。それが悔しくてですね、自分ではある程度自信はあったんですが、ただ、自分の中だけの自信だったんで、深くグサッと刺さったんですね。お前のせいで負けたんだということを、その時の状況を今でも覚えています。それから更にもっともっと練習しようと、絶対負けるのは嫌だ、負けるというか、少なくとも自分のせいで負けるということはないようにしよう、一人では絶対練習しようとその時に強く思いました。そういった中でバレーボールを一生懸命やり始めるんですが、ただこの時の身長も更にですね、入学当時は165ぐらいあったんですが、卒業する時に188ぐらいい、中学校ですね。だから、皆さんもあったと思うんですが、成長痛ですよ。膝が痛くて曲げられないという状況が1年ぐらい続いたんですね。ちょうど中学校の2年から3年生の時、普通に運動は出来るんですけど、いざジャンプしようと思うと痛くて運動出来ない。常に冷やしたりサポーターしてやるんですけど、結局バレーボールを、ボールを使った練習がほとんど出来ない状況が中学校の2、3年生続いたんです。結局良い成績というか、一生懸命やるにはやったんですが、大体県の大会では1回戦か2回戦で負けてるというものでした。

ですがそんな中で、自分でも中学生の時に良くやったなと思うことは、その頃中学校の2年生ぐらいの登下校ずっと、うちの学校、徒歩だったんです。2キロ3キロぐらいで、徒歩で30分ぐらいかかるんですが、そこを登下校全部、つま先でずっと歩いて帰って、帰りもずっとつま先で。後ろから見るとたぶん変な感じで、こんな感じで中学生が鞆を持って、こうやってつま先で歩いて帰る。ずっとこうやって帰っていくのを2年間ぐらい続けました。あと、鞆がある。握力を鍛えるんだということで、自分なりの個人のトレーニングというか、こんな感じなんですけど、一人よがりの所もあるんですが、鞆がですね、教科書全部入れて行って、しかも片手で、ずっとこうやって、豚鞆になるんですよ、幅広の。で、サブの方はトレーニング袋とかあるんですけど、そういったものを入れて歩くと。ずーっと歩くと。しかも片手で、行きは片腕、右手だけだと、帰りは左手でずっと帰

ると。そういったことをやっていた。何であんなことをやっていたのかなというアホなことなんですが、純粋な当時の中学生の私は、こうやってやればちゃんと上手く、バレーが上手くなるだろうと、他の人よりはちゃんと、僕のせいで少なくともエースとして引張れる存在になれるんじゃないかなということで一生懸命やっていた。といったのが中学時代ですね。純粋に何かやってみようというように。バレーをやろうというよりは体を鍛えようという思い。

で、その後に、地元の高校に進むことになりました。当時山口県、今でもそうだと思うんですが、宇部商がダントツで一番でした。とても中学校でも有名でした。宇部商業というところはすごいところで、山口県でいったら一番。他の高校は全然知らない。というような感じだったんですが、当時宇部商という考えが全然なくてですね、地元が一番家から近い高校、たまたま岩国高校があったんですが、そこになんとか入学出来まして、バレーを続けてみようかなという話になりました。その時に、そうですね、その時も特に高校に入ってからまあそういった、つま先歩きも続けていました。まあそんな状況です。ただ高校に入ってから困ったのが、顧問の先生が来ないんですよ。練習に。1年生で入っても。一応、進学校だったので3年生が、僕ら1年生が4月に入学すると3年生は辞めてるんです。1年生と2年生で練習するんですけど、かろうじて10人来るかなあぐらいで、練習もほとんどしない。体育館も使えないので、大体授業が3時半か4時ぐらいに終わるんですが、それから体育館が使えるまでの間、5時半か6時から体育館を男子が使える、女子はその、4時半から5時半まで使って終わり。というような形を続けてましたね。

で、そんな中で、結局自分の中で、まあ今思っても高校の時も先生もいなかったし、誰もこう教えて頂くというのがなかったの、自分で、今でもよくやっていたなあと思うのは、月刊バレーボールとかですね、今でも巻末の方に、当時全日本の三橋さんや岩島さん達が、こうやったらバレーボールって上手になるんですよっていう紹介記事があったんです。で、それを自分なりに解釈して、こうやったらレシーブが良い、こうやってやったらまあ身体が、ジャンプ力鍛えられるんですよという縄跳びや、そういったのを、ほとんど、一読者として読んでそれを日々実践するというかですね、そんなことでバレーボールに関わってました。で、そうなるって指導者もないものですから、体力だけはつくんですが、バレーとしての組織、組織で勝つというものはほとんど皆無でした。本当でしたら、本当というか、あの一、皆さんのような指導者がいたら、「ここはこういう風にプレーしないといけない。」だとかですね、「こういったプレーをしたらもっと強くなれるんだよ。」っていうのがあったのかなあとも思うのですが、なかなかそこまでですね、レベルが達することもなく、高校3年間過ごしました。ただ、背が高いというのはまあ目に付くんですね。そんな中で、一つですね、いきますと、あの一、たまたまその時に1回戦で、あの一、高校2年生の時にトーナメント、まあ県のトーナメントがあるんですが、そこで宇部商と当たることになりました。で、その時、私と同年代の南さん、南克幸さんがいらっしゃったんですが、あの人チームと初めて当たりました。当時2メートル、2メートルの選手です。びっくりしたんですけど、宇部商の体育館でやったんですけど、靴箱があるんですが、南さんの靴だけ、当時その時は分からなかったんですけど、靴が大きすぎて靴箱からはみ出ているんです。で、「この靴誰の靴かなあ。」と皆で言っていたら、後ろから宇部商の南さんが来て、「これ俺の。」とか言ってこう取っていきます。「こんな靴履くの？」というく

らいでかい、32、3ぐらいある靴なんですけど、それを履いてプレーされていました。で、当時宇部商、山口のインターハイがあったんですかね、1年生でレギュラーで出て、ベスト4に出るというのを目の当たりにして、すごい高校生がいるものだなあ、っていうのを見て、まあ初めて、だんだん、えっと外の、他の高校の選手にですね、目がいくようになりました。それと同時にですね、宇部商と当たったのが良かったのかどうか分からないんですが、岩国高校に背の高いのが一人いる、で山口県にもなかなかいないなあということで、当時、新藤さんという監督さんがいらっしゃったんですが、その方から誘われて、実は中国地方の高校生の選抜合宿というのに出させて頂くことになった。そこで、日本たばこに行って合宿をするんですが、何分全部初めてです。他の有名高校の子が来るんです。崇徳の子だ、広島工業大学附属の子だ、鳥取工業の子だったりするんですが、皆レベルが違うんです。私だけ取り残されて、打てるスパイクといたらオープンしかなくて、速い攻撃とかライトの攻撃とか頭になかった。オープンなら打てます。で、オープンだけやらしところかという感じだったんですが、逆にそれが良かったのかな。結局、中国の合宿の中からさらに推薦で1名だけ、今度は全国の高校選抜の合宿に行けますというのがあ。そこで、たまたま運が良く、崇徳の高校のチームが春高バレーと夏のインターハイと国体の3連覇したチームだったんですね。中国地方から主だった選手がその6人が出てきたんですけど、その6人は自動的に全日本の高校選抜のチームとして海外かどっかに遠征しに行くことになった。じゃあ、誰出そうかという話になった時に、「それじゃあ中国からは重田というのがいるから、それを全国の高校選抜の合宿に行かせます。」ということで、だんだんこう、富士フィルムが、なくなったんですが、1週間ぐらい合宿をしました。そこでもやっぱり同じなんです。今度はいきなり田舎の高校生が、超高校レベルの人達、高校生離れている人達を目の当たりにするんです。で、当時の選抜の監督をされていた方も気の毒のように思ったんですね。「重田君はチーム練習はいいから球拾いだけしていいよ。」ほとんど球拾いで、スパイク練習だけさせてもらいました。実はその時に、これも一つの出会いか、面白いなあと思うことがあったんですけど、私と同じ境遇の子が一人いたんです。その子は関東の東京の人だったんですが、今もたぶん東レで監督かコーチをされてる、泉川さんというのがいらっしゃったんですが、その方も、中学、高校ほとんどバレーしてません。バレー部にいましたけど、バレーしてません。いつもトレーニングだけしてるんです。で、仲良くなって、それから知り合いとか割と話をするようになったんですが、その子も同じようなことを、「僕達何しに来たんかな、皆羨ましいな。」というように話したことを覚えています。ただ、その子、泉川さんの方は、桁違いに同年代の子と違ったんですけど、たぶん他の東亜のレフトもそうなんですが、日本人離れているような高校生です。スパイクもそこそこ打てるんですが、高さやパワーがまるで違うというところがあるんですけど、泉川さんの方は、その合宿の後全日本に選ばれて、で、確か引退するまでそのまま全日本にいました。私の方は、そのまま特にレベルもそこまでなかったのかなあというのがあるんですけど、その高校選抜の合宿に行ってすごい世界もあるんだなというのがあって、まあそんなもんだったんですね。ただ、これによっていろんな外の大学だとか実業団とか男子バレーの世界も結構いろいろ広くて、すごい選手がいて面白いもんだなと、だんだん自分の頭の中で意識が出てきたところ。時代です。

でその後、これからはこちらの大学の話になるんですけど、当時、私が月刊バレーボ

ールを見ていた時に中垣内さんという筑波の方が大学デビューした年で、高校3年生の時に筑波が、日体大と法政、早稲田を抑えて優勝した時があった、その時に2年生か何かでレギュラーで、かなり脚光浴びてカッコ良かった、「俺も筑波に行こうかな、筑波だったら体育専門学部があつて行けるかもしれない。」入学、第一希望にしてみました。第二希望でこちらの広島大学、当時、前期、後期の試験になってましたんで、そういった組み合わせですね、一応、受験をしました。その時に大学受験の時もそうだったんですが、今度は私が富士フィルムだとか、なかなかいろんな方から目を向けて頂いたんです。大学からもですね、日体大だとかそういう所から話が来たんですが、「いや、もう私はそんなところに行くことはありません。」と。「とりあえず私は筑波に行って、筑波が第二希望の広島大学でやろうと思います。」という話に。「バレーの方は一応その程度で続けていこうと思います。」というような形で考えていたのを覚えています。その中で、その時に筑波に受けに行ったのですが、やっぱり全国区というかそれなりの選手が来て、インターハイでベスト8に入りましたと、インターハイ常連校の子たちが来てるんですね。実技の時間なんかレベルが違うというのを痛感して、取えなくその時は筑波大学は落ちてしまって、その時私もかなりショックでして、どちらかと言うと広島大学の方が通らないだろうと思ってたんですよ。一次試験は何とかやって、二次試験で初めて広島大学の方に来て、西村先生にお会いしたのを覚えています。当時、どちらかと言うと半分投げやりです。入学試験の実技とか投げやり、ほとんど入試という緊張感なくですね、多分広島大学だめだと、好きなようにやろうといったような気持ちで受けていたのを覚えています。多分今でも入試だったらそうだと思うんですけど、「普通にボールを上げてスパイク打って下さいね。」とか言ってどんどんスパイクを打たせると思うんですけど、その時に僕は先輩方に「もっとトスをこうして下さい、バックアタックも打ちますから、このバックラインに上げて下さい。」と、自分の打てること全部、自分の出来ること全部ぶつけるという意味はなかったんですが、そういったことをして、かなり入試という意識もなく、試験という意識もなくやっていました。「サーブを打って下さい。」と言われた時もジャンプサーブ、入るかどうかわくわからんようなジャンプサーブをカ一杯打つ、というような形で受けていたのを覚えています。その時も、やりすぎたかなと思ったのが、第二実技か何かの試験の時に、バスケットゴールに10秒間に何回入れますかという、ゴール下ですね、何回出来ますかというような試験のテストがあったんです。その時に、10秒間に7回ぐらい入れたんです。「お〜。」って皆が盛り上がる訳ですね。「すごい、こいつ。」と言った時に坂手先生に向かって中指立ててですね、「どうだ。」というような無茶をですね、「すごいだろう、ここまで出来るんだ。」というようなことをやった記憶があります。申し訳なかったな、入学して謝ったんですが、何とかその時は試験が終わりまして、終わって帰る時に、この言葉で僕入学出来たのかなというようなことがあるんですけど、西村先生が近寄って来てですね、「何で広島大学来たんだ。」って一言言われたんです。その時にたまたま岩国高校出て、広島大学を卒業された津山さんという先輩がいるんですが、その方に大学の状況を聞いてたんですね、「広島大学ってどのぐらいの強さなんですか？」って最近はどうぞ東亜大学が新設校で出来たばかりで、だんだん、今まで広大、福山って、広島大学が覇権を中国地方の争ってたんですけど、東亜大学が対抗してきて、東亜大学に勝てないんだと聞いてましたから、西村先生に「何で来たんだ。」と聞かれた時に、こちらは何にも知らないのに、はったりですよ。「東

亜大学を倒すために来ました。」と西村先生に真っ正面に向かって真面目に答えたのを今でも覚えています。広大福山の体育館を出て、さあもう帰ろうかという時に呼び止められたのを覚えています。「何で来たんだ。」「何でここ受験したんだ。」「東亜大学を倒すために来ました。」と言ったのが入ったのかなあと、私は受験が終わった後に、もう早速自分はこんな無茶苦茶したから通る訳がない、もうどちらかと言うと体育は諦めようと、予備校探しを始めてた時に、「おい、通ったぞ。」というのが高校から連絡があつて、「そんなアホな。」っていうのが広島大学に入学出来た始まり、付き合いが始まったというか、始まりです。相当無茶をして入って申し訳なかったと思ったんですが、今あるのはこういった形、広島大学に入ったっていうのが、少し自分が無茶をしたのが何が功を奏したのか分かりませんが、入りました。

大学の話になるんですが、特に入ったら今でもそうなんですかね、1年生はみんな丸刈りですね。1年生はしなかった。だから、僕が来た時はまだ、福山が、広島大学福山分校というのがありまして、それがこちらに西条に移転の最中だったんですね。1年生は広島市内の千田で過ごして、2年生になったら皆福山分校になります。「福山分校になった時は皆坊主にして下さい。」というような伝統があつてですね、皆さん先輩がそれを守ってらっしゃったんですけど、私らも例になく、2年生の時に坊主にして福山に行って、西条に来ることになったんですが、こちらに来ることになった。とにかく先輩は恐かった。直視出来なかったです。中学、高校とあんまり上下関係の厳しくない所で育ったものですから、いきなりそういった所に放り込まれてしまって、大変だった。先輩が恐くて恐くてというのを覚えています。そうしながらも、何とかいろんな先輩から教えて頂いたり、こうやってバレーするんだよといったのを教えて頂きながら、何とか大学生活を過ごすことが出来ました。

その中で、そうですね、あるのはそこから、大学の中でですね、この次から実業団の話になるんですが、まだその時自分が実業団に入ろうというような思いは全然なくてですね、当然あの、教員になろう、教員志望で、なろうとしてたんです。してたんですが、たまたま1年生の時に千田に大学があつた時に、NTT中国さんという実業団、地域リーグ、今でいうチャレンジリーグの下の西部地域リーグというのがありますが、そういった所にちょっとしたチームがありまして、そこに練習試合させてもらえるっていうのがあつて、そこに出してもらった。でその時、バレーって大学までじゃないんだと、ちゃんとあの日本リーグなんて夢にも見てないんですが、こういった所でもちゃんと会社としてバレーボールというのにちゃんと取り組んでいるチームがいるっていうのを知ったのを覚えています。そこでもやりたい放題でしたね。どちらかと言うと先輩からやらせてもらって、自分の力が実業団っていう所でどれだけ通用するのかなあとと思って、強気強気のスパイクを、まあスパイクしか出来ないんですが、それを一生懸命、自分の力を試そうとやろうという形で取り組んでたっていうのを覚えてます。そういったのがまた上手く出たのかもしれませんが、大学の3年生頃になりますと、NTTさんから「うちに来ないか。」という話がありまして、悩んだんですが、自分教員になりたいというのもありますから、「今はいいです。」という話をしてたんですが、だんだんそういった大学の中でも中国リーグや西日本の選手だとかいろいろ出会っていく度に、もっとバレーしたいなという思いがですね、芽生えてきまして、そこからまたバレー、企業入ってみようかな、全然どれだけ大変かとか何も考

えずに、「とりあえずバレーが出来ればいいや」というところでチームに入れられました。加えて、こうまあずるい所もあるんですが、例えば、他の会社に入るとすると、午前中だけ仕事をして昼からバレーが大体ほとんどなんですよ。なんですけど、そのNTT中国では「普通に仕事して、夜バレーしてもらったらいいから。」ちょっと安心して、自分もちゃんと普通に会社で仕事出来るんだと。で、会社でバレーすればいいんだという、ちょっと甘い考えでNTTをとりあえず選んだんです。チームがどんな状況だとか今このチームはどれくらい強いのかとか真面目にやっているのかとか、そういう所を一切考えずに近くの会社でバレーが出来ればいいというところで、甘い考えで入ってしまったというのが。当時どちらかと言うとですね、会社に入ってみたんですが、広島大学の方が真面目に練習していました、このチームよりですね。それまではどっちかと言うと昔で言う、昔の校舎です。甘いバレーをした人達が広島ですからバレー人口多いんですが、そういった人達が先輩というか、日本たばこには入れないんだけど、NTTだったらやっつけていけるかというような方々が集まってですね、ちょっと同好会的なところだったんですよ。そういったところのチームに入っていってたんですが、この時に思ったのは、先輩だから言い方がどう言ったらいいか、監督の方がやる気になったようですね。「選手が今までなかなか採れなかったけど、たまたま重田が来てくれた。そこそこ試合が出来るようになった。」こういうことになって、じゃあこれから頑張っって練習しようかっていうのがあるんですね、先輩から「お前が入って来てから練習が厳しくなった。」と言われてですね、この時NTT中国っていうチームも少し前向きに練習していこうかなっていう雰囲気になったと聞いています。まあたまたま大活躍ということになってるんですけど、ほとんどただのまぐれでこういう風になったんです。いろいろ書いてあります。バレー漬けの生活になるのを嫌い、そういったバレーに対しては甘い考えだったのかな。

ここでなんですが、皆さんも今学生生活されてですね、たぶん生活態度、私がそうだったから言う訳じゃないんですが、大変だったんですよ。当然4年生ですから授業も少ないし、アルバイトやったりとか、「朝も夜も適当に起きてりゃいいや、部活に行っておけば大丈夫だろう。」って感じだったんですが、いざ入るとこれが大変ですね、仕事をまずしないといけない。仕事に行くともまず、仕事の時間は9時から5時半までなんですけれど、大体バレー部の人は7時半には来て、皆の机拭くんだと。運動部は皆そうしなきゃいけない。「誰よりも早く来て机を拭け。」と。「仕事をしろ。」と。「5時半までやったらすぐに帰れ。」と。で「6時半から練習をちゃんとしろ。」と。という決まり、すごい厳しい、私にとっては厳しい世界でして、でバレーへの姿勢も少し変わったものですが、6時半から9時、真面目な練習ですね。大抵9時まで練習して、帰って10時、ご飯食べて11時で、その生活を繰り返すうちに大学4年生の時の自堕落な生活がきついですよ。当時大学4年生の時85、6キロあった体重が一気に78キロぐらいまで落ちました。疲れる、休めない。で、土、日も練習します。なかなか大変な生活して、会社に寝坊をしてしまったことも1回か2回ありまして、大変でした。そういった生活態度っていうのもあったんですが、そういった中で私のバレーボール人生が始まってしまうというところなんです。

で、それで、すいません。話がちょっと長くなってるんですが、こうやってバレーを始めて会社としてやっていくんですが、いざ、やっぱり、それぞれ、だんだん、だんだんこう、当然そうなんですけど大学生でやっていた方がほとんど、その中でも選ばれた方だけが

企業に入って来る、レベルがだんだん、だんだん上がってくるし、それにつれて人も少なくなってくるんですが、とにかくスピードが速いんですよ。たぶん実業団のチームでされていた方だと思うんですけど、スピードとパワーが全然違うんですよ。僕が入った時に思ったのは、僕もそれなりにトレーニングとか積んできたつもりだったんですが、それを更に上に行く人達ばかりで、真面目に練習してないと言いながらも、真面目に練習してなくてもそれなりに出来る人が数多くいまして、なかなか自分もちょっと甘かったのかなあと思うんですが、その中では何とか企業の中でバレーボールを続けていくってことに、で、企業っていうことですので勝たないといけません。当然不真面目な練習というのもあったんですが、いざ試合になると応援もあったり、それに対して私達の試合に対する、出場したり遠征したりするのもお金がかかってくる、そういったのも全部、会社が出してくれるんですが、「その代わり勝ちなさい。」というのをだんだん強く言われてきて、それなりに練習も厳しくなって、その中でそれでも何とか切磋琢磨、部員の中でしまして、私がどんどん練習試合をします。遠征もします。でチームもレベルアップします。そんな中で、何とか地域リーグの中で良い成績を収めることになりまして、当時入社した時は、西部の地域リーグで3位とか4位でそんなところですよ。で、入社して3年目4年目でだんだん西部の地域リーグで上がるようになりまして、一回その中で、書いてありますが今2位、もうちょっと頑張ったら実業団リーグに行けると、今で言うチャレンジリーグという所に上がれるようになりまして、というところまで特に頑張っていました。だんだん強くなってくるとちゃんと選手も回ってくるんですね。入社される選手もかなり質の高い選手、背が高かったりですね。それなりの選手が入ってくるようになりまして、何とか次の、上へ上がっていきこうという、新聞にもこういった形で載れるような形になりました。ここに書いてあるんですが、今のリーグでもそうなんですけど、プレーオフというのがありまして、リーグの1、2位になりましたら、上のリーグへ上がるための試合がありますと、その試合を2回ですね、1回目はだめでした。2回目何とか行こう、といったところの記事ですよ。この時3回、何とか西部の地域リーグを通過して優勝しまして、次の実業団リーグへ上がっていきこうというところですよ。この時もですね、皆さんも御存知かもしれないんですけど、だんだんチーム数が少なくなってきましたね。昔で言う富士フイルムさんがなくなったり、バレーボールのチーム自体が少なくなってる時で、昇格のチャンスがたくさん出てきたと、そういったところで何とかその波に乗ってですね、試合に勝って頑張っっていきこうと、この時は、3回目ですので今度には行けるだろう、といったところで一生懸命頑張っってたところで、プレーオフをこういった形でもう1回全勝して、上がっていきぞといったところなんですけど、この時もだめでした。ぎりぎり、半分指にかかっていた。最後のフルセットで12-9まで行ってたんですよ。15点マッチのところまで行ってたんですが、相手に、日立国分というチームなんですけど、そのチームに最後逆転されて、涙をのんでた。実業団リーグは行けなかったというところ、この時は一番自分の中でもバレーボールとしても、自分のバレーボール人生においても、競技能力、選手の能力が高かった時かなと。全部見えるんですよ。スパイクするにしてもボールに対してもですね。相手のこととか見える、スパイク打つ前に決まるのが分かる、そうなるぐらい真剣に取り組んでました。ただこの時期そうなんですけど、話が変わるとですね、私はバレーボールで負けて涙することなかったんですよ。負けても。一番最初に「お前のせいで負けたんだ。」と言われた時に

泣きましたけど、あれから負けて悔しいから泣いたというのがなくてですね、どちらかと言うと。全然、負けたらもう次だと、やるしかないんだというところ、その気持ちでやっていた時期なんですけど、この時にも1回だけ泣きました。というのはですね、この時期もうチームは乗りに乗ってる、練習試合とかいくつか転戦するんですが、当時広島に拠点があったんですが、会社の方から許しが出て、茨城のさっきの負けてしまったんですが、日立国分さんとか、今はないんですがコスモ石油さん、実業団チームのリーグのレベルのところなどとやるのが出来たんですよ。互角にやっていた。最後その実業団リーグの中でも割と中堅どころの、NTT 東海さんという所があるんですけど、名古屋にあります。そのチームと練習やってまして、自分も乗りに乗ってた、この時今まで1回も勝てなかった、今回の練習試合なら半分以上取れるだろう、チームの勢いがあった時に、自分の膝が壊れて練習試合の直前のスパイク練習、歩けなくなったんですよ。その時にはちょっと泣きましたね。監督のとこまで行って「すいません。試合出れません。」と言ったことを覚えています。謝りました。「チームがこんな状態の時に自分がこんなことに。すいません。」で、当然自分が出れないのもそうなんですけど、周りの選手や相手のチームもですね、相手のチームも強いところとやるからこそ自分たちも練習になる、弱いチームじゃ練習にならないかということじゃないんですが、やっぱそういうVのチームの選手がいなくなると「練習試合をやる意味ないじゃん。」と言われたんですが、そういったことで申し訳ないなあと思っていたのを覚えています。で、先輩から「しっかりしろ。」と言われ、「しっかりしろ。」と。更に結束を固めてやっていこうとなって、チームとしても一番勢いになったと。で、この時にどんどん、どんどんチーム数が減っていくんですね。そう言いながらも、どんどんVリーグのチームもなくなっていきまして、合わせて実業団チームがなくなっていくんですね、下から下から自動に上がっていく時期でもあったんですが、夏の大会で上位2チームは実業団チームに上がることが出来ますよというような大会ができたんですね。で、その時に秋田県にあったんですが、何とか決勝まで進みまして、優勝にはならなかったんですが、この時の決勝は今のVリーグの豊田合成さんという所とやりました。で、この豊田合成は、すごく、どちらかと言うと日本リーグのVリーグのチームが解散する訳ですよ。主力メンバーが「俺達どこに行けばいいの？」となって、いろんな実業団のチームに降りていきます。「うちに雇ってくれないか、雇ってくれないか。」と、契約社員という形で入ってくるんですが、そういった選手が3人から4人いるんですよ。そういった所とやって、こてんぱんにやられてしまったんですが、まあ決勝まで行ったんで、実業団リーグに上がれました。なんですけど、だんだん記事が大きくなってくるんですけど、実業団リーグに入りましたとなったんですが、またチームが減っていきます。今度はプレーオフなしで、上位2チームになったら絶対日本リーグに入れますよというようなことになったんですよ。Vリーグがチームを増やすということになったんですよ。で、差が開いてしまっている。で、この時実業団リーグの中からVリーグに上がれるんだということで、こういった記事。でも、実際は全然こんなことなくてですね、というのは、やっぱり実業団チームに上がったら上がったで、レベルが違うんですね、西部地域リーグと。今度は選手が皆大きい。でかくてパワーがある。しかもスピードも速いという形で、この時には1セット、いや、1試合ですかね、14 試合…20 試合ぐらいやって、1 試合しか取れませんでした。レベルが違いすぎる。そうこうしてる間にですね、なんとまたチームが減ってですね、自分達のポジ

ションがV1リーグの中頃ぐらいまで上がってきまして、ひょっとしたらVリーグに行けるかもしれない。ここにも書いてあるんですが、だんだん企業スポーツで廃部っていう波が自分のチームにも襲ってきた。厳しいことに、勝たないといけない。ただ勝つというのではなく、勝たないとチームがなくなっちゃうよっていう状況だったんです。その時必死でバレーやってたのを覚えています。とは言いながらも、だんだんと厳しい運営とは言いながらも、やっぱり実業団上がると会社の待遇というか、チームの待遇が変わってくるんですね。一番この実業団リーグに上がって驚いたのは、皆さんもそうですけど、自分達が試合します。そこで、お金をもらうことはないと思います。入場料を取ります。そういったところがクラブチーム、実業団チームの全然違うところ。自分たちの試合を見ることで、たくさんの方がお金を。恥ずかしくない試合をしないといけないなと思ったのを覚えています。で、いよいよですね、もう間もなくなくなっちゃいますよ。そういった時期にですね、会社がどんどん景気が悪くなっていったんで、チームとしての存続が難しいです。スポーツチームを持っているという価値がだんだんなくなってきてますね。そういうところから、もうほとんど廃部寸前、何とか会社、他の社員の人の思いもあって、何とか同好会という形で存続することが出来ました。ですが当然、今まで会社として移動が新幹線とか飛行機とかあるんですが、そういったものもどんどん削減されて車で行って下さいとかね。バスで行って下さいとかね。そういったところ経費削減の波が来て、で、まあ、そういったチームとしては暗い状況。まあ最後を飾るという訳じゃないんですが、そんな中ですね、今で言う黒鷲旗、今お正月にやってるやつなんですけど、そのあたりでですね、東レとやってなんとか勝ってベスト8になることが出来ました。裏があって、東レというのは当時全日本の選手がちょうど黒鷲旗とスケジュールが重なって、皆いなかったんですよ。東レの主力選手4人がごっそりいなくてですね、サブのメンバーほとんどでやったんですが、何とかフルセットまで持ち込むことが出来て、それで何とか勝ったんですが、なぜ勝てたのかという自分でも不思議なんですけど、何とか日本Vリーグの東レに勝ちましたっていうのがちょっと最後を飾ることが出来たかなと思います。この後ですね、私の方も三十何歳になってですね、競技が出来るタイミングがなくなりましたので、引退してですね、バレー部の方もその何年後かにはなくなるという形になりました。

長くお話しさせて頂いて申し訳なかったんですが、なかなかこう一番振り返ってみてですね、バレーに携わっている皆さん、今厳しい状況だと思います。我々もやってる側はそうなんですけど、バックでお手伝いしている側からしてみると、何とかバレーボールというのを盛り上げていきたいな、盛り上げていかないといけないなという思いも今は感じています。当然この私もバレーボールを引退してからほとんど競技をしていません。社業に専念ということもあってどっかに転勤とかいろいろあって、やることもなくなってしまったんですが、今後残りのバレーボール人生というのを考えた時に、同期の同じバレー部だった連中もそろそろ指導者というか、運営側の方に携わるのもだんだん増えてきたんですね。今後私もですね、そういった形でバレーボールという競技に対する恩返し、自分を成長させてくれた競技に対して、恩返しをしたいという意味でですね、何かしら携わっていかうと考えております。すいません。長々となってですね、私の一方的な話で、退屈する所もあったと思うんですがこういった形で私のバレーボール人生、きっかけは本当何のこともないですね。上手く歯車というか、バレーとは合ったんでしょうね。形でここまで進

めることが出来ました。これからも何とか頑張っていこうと思いますので、今後ともよろしくお願い致します。以上で今日の講演を終わります。どうも有難うございました。

### <質疑応答>

井上：失礼します。57期の井上周二です。先程、大学では教育学部で教員を志望していたと言われましたけど、中学校や高校で選抜に選ばれたりしてレベルの高いプレーを見たり、多くの経験をされたようですが、プレーが確立していない若い段階では、ウエイトトレーニングなどして身体を鍛えるよりも、試合を見せたりしてイメージを持たせたりすることの方が大切だと思われませんか。

重田さん：そうですね。イメージも大事。まあ当然、中学、高校生は個人的な身体能力が深く関わってくるんじゃないかなと思うんですね。早い体質的に筋肉付けても大丈夫かなという子はトレーニングをしてもいいんじゃないかなと思うんですが、将来的にこの子はバレーボール競技を担う選手になり得るっていう子に関しては、かなり負荷の高い筋トレとかはまずいんじゃないかなと思うんですが、上手く疲れが残らない程度の筋トレ、負荷をして続けていった方が良いのかなと思います。イメージトレーニングというのも当然大事ですね。良いイメージというものを常に持ってプレーするってことが上達への早道だと思いますので、トレーニングをしながら、これをやればプレーが、レシーブだったら一歩早く踏み込める、ブロックにしてももっと高く跳べるんだと、スパイクにしてもブロックを弾けるんだと、イメージを持っていけば、いくことが大事かなと。

井上：有難うございました。

東：こんにちは。57期の東です。企業でスポーツをやられていたということですが、企業でバレーボールをやるということになると、バレーでお金をもらっているということになるので、モチベーションの浮き沈みもあると思うんですけど、そういうところで、モチベーションを常に高く持ち続ける秘訣なんかがあれば教えて頂きたいのですが。

重田さん：モチベーションを高く持ち続けるには、気分転換ですね。いい息抜きが必要じゃないかなと思うんですね。メリハリというかですね、休みの時はしっかり休んでバレーのこと考えない。いざ体育館来ました、バレーをやるんだという時になったらしっかりバレーに取り組んで。当然あの、お金をもらうということですが、そこはしっかり社会人としての心構え、逆に言ったら会社員の方は皆さんプロなんですよ。当然こちらにいらっしやる方もそれでお金をもらっています。ということになりますかね。先生をやってお金をもらっています。例えば、会社員サラリーマンやってお金をもらっています。プロといたら大袈裟になるかもしれませんが、要は自分の仕事でお金をもらう。アルバイトでもそうですが、そういう意識は常に、常にかどうかこれから働くにあたって、どんなことであれ持たないといけない、持ち続けようと思ったら、そのモチベーションから忘れる。いいリラックスで

すか、いい気分転換が必要になるんじゃないかな。ずっとずっと持ち続ける、それはもう大変です。上手く気分転換をしてモチベーションを持つっていうストレスから解放する時間が必要になるんじゃないかな。

東：有難うございました。

東口：59期の東口と申します。先程、重田さんが膝を怪我してと言われたんですが、私も去年膝を怪我してまだ復帰はしてないんですけど、で、その後にチームにいい勢いになったって風に言われてたんですけど、怪我をしてチームが良くなったことで、重田さん自身で何か変わったことはありますか。

重田さん：そうですね。変わったことと言うとですね。もっと気持ちが楽になりましたね。それまではどちらかと言うとですね、俺がやらないといけないと、俺がやるんだと、思い上がりに近い、俺がやらないとこのチームはダメなんだみたいな気持ちが幾分あったと思うんですよ、自分の中にですね。膝を怪我しましたと、で、自分はチームに出れません、試合に出れません、となった時にその練習試合はどうなったか、そこそこの戦いとかするんですよ。自分はその時は大きな勘違いをしていたので、気分が楽になりましたね、その時は。どちらかと言うとチームが上手く回ったってのもお互いそうだと思うんですが、私にとっては、俺がいなくてもちゃんと他のチームの、メンバーで穴はちゃんと埋めてくれるし、それなりの戦いが出来てるなど安心した。他のチームのメンバーからは、「やっぱ、重田がいなくてだめだ。」と「重田さんってこういったところで頑張ってくれてたからチームが成り立ってたんだな。」とお互いの思いやりを再認識というか存在の再認識と言いますか、そういったことが効果としてあったんじゃないかなあと。自分としては、チームに対する信頼度が増したと言いますか、何とかしてくれといった時に頼れるといった気持ちの変化がチームとしてプラスに働いたんじゃないかなあとと思います。答えになってるかな。

東口：有難うございました。

池田：56期の池田です。広大バレー部の先輩としてお聞きしたいんですけど、広大バレー部での印象的なことですか、やっぱりさっき東亜大学の話が出ましたけど、今現役生もしっかり東亜大学を倒すために頑張ってると思うんで、その辺の印象的な試合とか、大学バレーでのお話を聞かせて頂きたいなあと思います。

重田さん：そうですね。大学の時は、一番最初、1年生、大学生の一員としてやった時に、大学の時の試合の気持ちでいいかな、印象的な。中国リーグの時に、一番印象に残ってるのはとりあえず東亜なんですね。東亜大学の試合。何とか勝ってやろうと考えるんです。でも総合力でも上とかですかね。まあ粒が向こうは揃ってるから、何とかしてやろうといったところですね、自分なりにいろんな工夫をしたのを覚えています。当然しっかり力一杯打ってですね、何とかブロックをかわすというようなこともあるんですが、ただ、ジャンプサーブで当時やろうと思ってたのが、普通のジャンプサーブじゃ絶対取られてしまうっていうので、いろいろ工夫して、今で言うフェイントみたいなジャンプサーブ、皆

が後ろ下がるじゃないですか、レシーバーが。その前に落としてやろうっていう練習をやって、実際に試合でやって、すごい大事な場面だったんすよ。フルセットまでもつれて、いい流れで来ると。ひょっとしたら勝てるかもしれないというところで、自分では息の根を止めてやろうという思いでやったジャンプサーブのフェイントが決まらなくてですね。それがチームに悪影響を与えて負けてしまったということ覚えてます。他のメンバー、チームには、かなり動揺してしまって、「なんであんなことしたんだ。」てなことで、かなりその大会が終わった後で責められた覚えがあります。そんなとこですかね。あとは、大学生の中で、クラブの幹部として過ごした時に、当然今のクラブもそうなんです、なかなか監督さんから指示があると、自分が楽になるんですよ、かなり。チームの運営として全部4年生がやるんですけど、そこ自分の中では4年生としてチーム全体を、広島大学のバレーボール部をどういうチームにしていくかというですね、どう連携していくかをもっと真剣に取り組めば、もっと強くなっていったんかなと、当時私、キャプテン市川さんと同期でいるんですが、その子に頼りっぱなしで、チームの運営その一人一人に任せてしまって自分は何もしてなかった。どっちかと言うとプレーに専念していたといった時がありましたんで、そういったチーム全体のことを考えて、後輩の指導とか、バレー部全体のことを考えて、もっといいチームになってたんかなというところですね。

池田：有難うございました。

谷：失礼します。57期の谷優香と申します。貴重なお話有難うございました。重田さんがNTTを引退されてもう競技には関わっておられないということだったんですけど、大学に入る時も一応教員を志望して入られたということで、辞めてからまたバレーがしたくなったりとか、今度は逆に教師になりたいとか、そういうことは考えられたことはありますか。

重田さん：そうですね。あの一つ、私がバレーボールを始めてですね、教師にならなかった理由は、バレーのもっと競技をやってみたい、というのも一つあるんですが、もう一つ、あれ、教育実習ってありますよね。あれっていうと失礼なんです、教育実習を受けた時に、かなり自分は人に物を教える立場に今の時点でなり得るのかと、すごい葛藤があってですね、どっちかと言うとそっちの辺りで教員には今の自分ではなれないと、その時に思って、こうやってバレーが今自分にはバレーが、そういったのでバレーを選んだのが一つです。皆さんも経験されてると思うんですが、自分にとってはまず教員の志望を諦めたのはそういったところです。もう一つ、競技終わってからバレーを、会社のバレーが終わってからバレーをやっていないかという、実はやってるんですよ。やってるといふか、9人制のチームの地域のチームに入って2、3ヶ月やったことがあります。ですが、自分の中で面白くなかったんです。もう何かどちらかと言うと燃え尽きてしまった。自分はもう、それだけバレーに専念してきた。いざ週1回集まってやります。勝ち負けにもこだわらないバレーと言うかですね、そういうの

を見たが入った時に、自分の中で楽しめないな、自分がどこまで楽しむかというのがあるんですが、楽しめないなという気持ちを持ったことと、周りの他のチームからした時に、「あいつは実業団でやってたんだよ。」と、「そんな人が何で地元のチームに来てバカバカスパイク打ってたんだ。」と。というのが自分の中で出来ないなと、今の三十何歳で、ある程度プレーは出来たんですが、そういったところでちょっと出来ないなというのがあって、遠ざけてしまった。今はもうまるっきりやってないんで、どちらかと言うと、続けてらっしゃるの方がまるで上手で、そういったところでやりたい気持ちはあったけれど、それを持ち続けられなかったから辞めちゃったというところですかね。

谷：有難うございました。

野口：58期の野口と申します。大学を卒業されてから企業に入られたということなんですが、企業に入ってから、もっと大学の時にこういうことをやっとならば良かったなあとということとかありますか。そしてまた、逆に大学の時にこういうことをやっていたから良かったなとかいう風なこととかあったら教えて頂きたいと思います。

重田さん：大学の時にやっとならば良かったなあとと思うことは、やはり、先程話したところもあるんですが、バレーに対する考え方を深く持っとならば良かったなあと。上辺のバレーとかですね、スパイクが打てた、ブロック出来たとか、レシーブが上がったというプレーって、すごく、その場で見えるプレーってちょっと上辺の考えで、もっと深くですね、バレーボールをいかに勝つ、どう勝つのかとかですね、うちのチームはどうだから、このチームに対してこういう作戦でやっとならばいいかと、そのためには今のチームとして何をしなくてはいけないのかですね、相手に対する自己分析もそうなんですが、相手に対する分析とかですね、それを実行出来るようには日々の練習で何をしないといけないのかっていう、モチベーション、考え方ですね、自ら考えるといったところまでですね、チーム全体でそういった意識を持とうと、やっとならばいいかと、自分なりではなくて周りの人にですね、こうやっていこうよっていうような形をですね、大学の時に同級生なら同級生同士ですね、「ここはこうなんだよ。」と、「あそこのチームはいつもあれでやられているから、それをカバーするためにはこれをしないとイケないんだ。だからこの期間絶対これをマスターしようよ。」というようなですね、そういったところまで深くですね、勝つための手段、足の運びから陣形の一つまでもっと詰めてやれば良かったなと。今の練習というのは、時間を潰すだけの練習、当時はそうではなかったかもしれないんですが、今となってはちょっと、時間を潰す練習になってたのではないのかなあと。9時から12時までの間だったら9時から12時まで、何をやる、何をやる、これをして終わりというところだったんで、そこをもっと詰めていけば、もっともっとチームとしては、強くなっていったんじゃないかなあと。ですね、入社して、大学時代やってて良かったなあとと思うのは、そうですね、ずっとオープントス、高いトスしか打ってこなかった。だから逆に実業団リーグに行くそうですね、高



イトスがほとんどなんですよ。二段トスがほとんどで、それを打ち切るスパイカーがなかなかいないという時に、あの普段、セッターにパス返りました、それを早い攻撃で崩していきますという時にはあまり使えないんですが、レシーバーが崩れました、二段トスを打ち切らなきゃいけないという時に、どうするとなった時に、たまたま私、そういうのが打ち切れていたんで、それは役に立ったかなあと。あまり小細工というか速イトスを打って勝たなきゃいけないという思いまでいかなかったんですね。それがまあ良かったのかなあと。プレー面で言うとそういったところですかね。

野口：有難うございました。

重田さん：どうもすいません。私、なかなか不慣れなところで申し訳なかったんですが、どうも今日は有難うございました。私も勉強になりました。今後ともよろしくお願いします。